# Neet Love

Ushi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｎｅｅｔ　Ｌｏｖｅ

【Ｎコード】
Ｎ９５１８Ｈ

【作者名】
Ｕｓｈｉ

【あらすじ】
ニートの父親を持つ普通の女子高生「あたし」。しかし今、その平穏は崩れ去ろうとしていた。

## （前書き）

こんなのでいいんじゃない

「Ｎｅｅｔ　Ｌｏｖｅ」
Ｏｓｈｉ

あたしのおとーさんは無職だ
ニートってやつなのかな？
よく知らないけど
あたしが子どもの時からはたらいてなかった
あたしのおかーさんは早く死んでしまったので2人でくらしてきた
だからおとーさんはご飯を作るのがじょうず
朝ごはん作った後はいつもぶらぶらしてる
あたしが学校から帰ると
「ゲームするぞー」
って誘ってくる
結構つよい
なんかハガー市長がすばやいんだよね
ゲームやりながら訊いてみた
「おとーさんは昔なにしてたの？」
「うーんパティシエだよ」
うそつき
前は花屋っていってた
その前はブリーダー
ころころ変わる

あたし達はなぜかでっかい一軒家にすんでる
掃除が大変なんで奥のへやはつかってない
まえに探検していたら閉じられたへやを見つけた
はいったら大きな箱があった

あけようとした所をおとーさんにみつかって沢山怒られてしまった
あんなに怒るおとーさんははじめてだった

今日もいつもみたいに朝ごはんをつめこんでいた
ＴＶをつけたらニュースがやってる
ウチの近所で若い女の子がたくさん殺されてるらしい
「お前も気をつけるんだぞー」
おとーさんは心配性だ
「だいじょうぶだよねー」
足もとにまとわりついてきた猫のミケを持ち上げて話しかける
最近ひろってきたのだ
「じゃあ行ってきまーす」
あたしは元気良くウチを出た

教室にはいるとみんなさっきのニュースの話をしていた
「怖いよねー」
あたしも素早く会話にくわわる
「昨日もまっ昼間に殺されたんだって」
「変質者のしわざよ」
ふーんと頷いたところで教師がはいってきた
何か忘れてる気がする
授業中にさっきの話を思いかえす
気になることがあったのだ
昨日のおとーさんは珍しくゆうがたに帰ってきた
しかも、なんと、疲れていたのだ
いやな考えが浮かんでくる
いつもウチのオカネはどこから出てるのか不思議だった
もしかして…
いやだよう、そんなの

帰るときには下をうつむいてた
あたしは人殺しの娘なのかも
何だか悲しくてとぼとぼ歩いていたら
「おまちなさい」
変わった服のおねーさんに呼びとめられた
道路で占いをやってる人らしい
けっこーカワイイ
「あなたには死人の気配がします」
すごいことを言う人だ
きっとこの人なら
「ついてきて下さい」
あたしがそういうとおねーさんは黙って頷いた

学校を途中でぬけてきたのでまだウチにおとーさんはいない
きっとあそこに証拠があるんだ
あたしはおねーさんと一緒に奥のへやに向かう
前にみたおっきな箱に手をかける
いっきにフタをあけた

中にはたくさんの写真といろんな道具が入ってた
写真の中ではコックの帽子をかぶったおとーさんがケーキを作ってる
べつのには花を育ててる若いおとーさんが
犬の飼育をしてるやつもあった
それに混じっておかーさんの写真もいっぱいある
あたしの小さいころのも
おとーさんが写真の中で着てるエプロンもきれいに畳まれて入ってる
あたしにはわかった
おとーさんはあたしを育てるために仕事をやめたんだ
なみだがポロポロ落ちていく

おねーさんは困ってるみたいだった

そうしてたらミケが探しにきたのかへやにはいってきた
なぐさめにきたのかな
こっちに呼ぼうと手をのばした
横を見たらおねーさんの顔がけわしくなってる
「逃げて」
おねーさんは叫ぶと変な水晶玉を投げつけた
あたしビックリ
玉が当たったミケはうずくまってしまった
ひどーい
抗議しようとしたときミケが変な声をだした
みるみるミケが大きくなっていく
「ちいっ、猫まため」
変な呪文をとなえて向かっていったおねーさんが吹っ飛ばされた
化け猫に変身したミケがあたしを食べようと大きな口をあけた
殺人犯の正体はミケだったのだ
こわいよう
たすけてよう
おとーさん
思わず目をつむってしまった
「大丈夫だ」
目を開けるとおとーさんがミケと組み合っていた
その間に復活したおねーさんが変なお札を投げつけた
ミケのひたいに張りつくと光につつまれる
ミケはにゃおうといって消滅してしまった

ケガの手当てをおえておとーさんが話しはじめた
箱を隠していたのは恥ずかしかったからだそうな
死んだおかーさんの保険金がすごくてウチは金持ちらしい

「でもなんできのうは帰りが遅かったのさ」
「それはね…」
じゃーん、とおとーさんが出したのはケーキだった
「きょうはおまえの誕生日だぞう」
そうだ、忘れていた
「びっくりさせようと友達の家でつくって持ってきたのだ」
誕生日会の準備をしようと早めに帰って異変に気付いたらしい
うれしいなあ
同意をもらおうとしたらおねーさんがいない
急いで探すと黙って帰ろうとしてるのを玄関で見つけた
「とんだ勘違いをしてしまって」
ばつが悪そうだ
待ってほしかった
言わなきゃいけないと思った
「わたしはあなたに会えてよかった」
あたしはおねーさんを抱きしめた
「あなたも一緒にケーキを食べましょう」
後ろでおとーさんが笑ってる
それでみんなで誕生日会をした
「おいしいだろう」
おとーさんは誇らしげだ
知ってるよ
わたしも笑顔で答える
「パティシエだもんね」
おねーさんも笑ってる
おとーさんもうれしそうだ
これはもしかしすると
よかったね、おとーさん
［おしまい］

「夢一夜」

そんな夢を見て感動のあまり目が覚めた。俺は疲れているのかもしれない。

## （後書き）

泣きそうになってた

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9518h/

Neet Love

2010年10月21日23時59分発行